

2017 年 11 月 26 日（日）「御国の弟子の務め」

マタイ 13:51-53

51 あなたがたは、これらのことがみなわかりましたか。」彼らは「はい」とイエスに言った。 52 そこで、イエスは言われた。「だから、天の御国の弟子となった学者はみな、自分の倉から新しい物でも古い物でも取り出す一家の主人のようなものです。」

53 これらのたとえを話し終えると、イエスはそこを去られた。

【序論】

13 章の 7 つの譬話も今回で最後になります。今日の箇所にも譬話のようなものが出てきますが、これは 8 つ目というより「締め言葉」と捉えた方がよいでしょう。何事も終え方が大切です。例としまして、ある本を読んだ後に、私たちはそれを振り返り、感想を一言でも書き留めておくということをしているのでしょうか。あるいは、スポーツ大会に出場した後や、器楽の発表会に出た後、何らかの試験を受けた後に、その時の自分がどうであったか、それに向けてどう備えたかを振り返り、反省する時間を持っているのでしょうか。そのあるなしによって、私たちの成長に大きな違いが出てくるとしたら、ほんの少しの労力をそのことに費やさないのはもったいないことです。説教も語りっぱなしではなく、自分の耳で聞き直しなさいとある先生から言われたことがあります。客観的に聞くことによって、自分の癖に気づかされ、内容的に改善すべき点が見えてくるからです。いずれにせよ、7 つの譬話の最後にも締め言葉が置かれているのは、これを聞いてきた読者がそれを十分に自分のものになっているかどうかを確認するためでしょう。

【本論】

本論 1. 理解不十分な弟子たち

あなたがたは、これらのことがみなわかりましたか。」彼らは「はい」とイエスに言った。

(13:51)

群衆には譬話そのものしか語られませんでした。弟子たちにはその意味が教えられました。特別な啓示を受けた弟子たちが、果たしてその意味を理解し、十分に自分のものにできたかどうかを主は確かめようとしておられます。弟子たちは「はい (Ναί, κύριε

「主よ、確かに」)と返答しました。彼らのこの答えは真実なものだったと思われますが、実際どこまで理解し得たのかは疑問です。と言いますのは、マルコ福音書の重要なテーマである「弟子の無理解」が、やはりこの福音書の底流にも流れていると思われるからです。もう少し後で学ぶことになりますが、15章では主イエスが律法学者について、「盲人を手引きする盲人」という譬をもって説明されます。このことについて、主は弟子たちがご自分の言っておられることの意味を理解できると思われた。しかし、ペテロは一面弟子の代表として口を開くのですが、「**私たちに、そのたとえを説明してください**」と問いかける。分かっていない。すると、主は「**あなたがたも、まだわからないのですか**」と叱責されるのです。このやりとりを見る限り、弟子たちの霊的洞察力が十分に養われていたとは言い難いでしょう。

しかし、そのような上辺だけの返答であったとしても、主イエスは彼らの前向きな答えを喜ばれました。「お前たちは本当に分かっているのか？」とは問い返さず、彼らがどんなに尊い立場に置かれているかを話し始めます。主イエスの良い教師の一面と言いますか、器の大きさを感じるところです。

本論 2. 学者と呼ばれる弟子たち

そこで、イエスは言われた。「だから、天の御国の弟子となった学者はみな、自分の倉から新しい物でも古い物でも取り出す一家の主人のようなものです。」(13:52)

主はここで弟子たちを「学者」(γραμματεὺς)と呼んでおられます。通常は律法学者など主イエスに反対する人々に当てて使われる言葉であり、弟子に向けて言われるのは極めて珍しいことです。ここでは明らかに良い意味で言われています。マタイ福音書では他にも、弟子たちのことを「**預言者、知者、律法学者**」と呼んでいる箇所がある(23:34)。これまで平凡に生きてきた弟子たち、取税人や漁師の出であるような人々でさえ「学者」と呼ばれる身分を得たのです。これは「天国の教えを受けた学者」、そしてどこまでもその教えを学び続ける人のことを言っているでしょう。

この「学者」の質は、一般的に言うところの専門的知識に精通している人とは少々異なります。天国の学者とは、上からの啓示を取り次ぐ人々なのです。単に聖書知識を人一倍持っていることとも違う。聖書全体を知っていることはもちろん大切なことですが、知的理解で満足するものではなく、自分自身がそれによって造り変えられ、へりくだり、福音に生き、同じ生き方に多くの人を導いていく人のことを言うのです。「**自分の倉**」というのは、その人の心のこと。知識と知恵の蓄えられた貯蔵庫です。その人が持つ聖書知識は、旧約聖書の「旧い契約」が土台にありながら、それらがイエス・キリストに

において成就した「新しい契約」という観点から解釈されます。旧約聖書全体がナザレのイエスへと向かう。「新しい物」「古い物」とは、その意味で旧約と新約の両面の知識のことを言うでしょう。「一家の主人」は自分の倉の中に何が入っているかをよく知っているのです、その時々に応じて家族が必要なものを取り出して与えることができます。弟子たちは、言わばそのような一家の主人のように、関わりのあるすべての人の必要を見抜き、聖書の御言葉をもって励まし、慰めを与えることができます。

私たちは日頃から聖書を読んでいると思います。ですが、何のために読んでいるでしょうか。自分の知的満足のためだけに読んでいたとしたら、私たちは「御国の学者」としての使命を十分に果たしてはいないことになります。蓄えた知識は惜しみなく人々に分け与えなくてはなりません。そして、分け与えるには、まず自分がその知識にふさわしく生きていなくてはならないでしょう。この世の戦いの最中にある人々に、神の視点を与えて差し上げるのです。

なぜ苦難があるのか。試練はなぜ与えられるのか。人間はどうして価値ある存在なのか。なぜ人を殺してはいけないのか。人とはどういう使命を帯びているのか。罪とは何か。良心はどこから来るのか。なぜ人は結婚するのか。夫婦とは何か。愛とは何か。赦しとは何か。歴史はどのように始まり、どこに向かっているのか。すべての答えが聖書にあります。

私は聖書通読をする時に、毎回違ったテーマを持って読むように心がけています。そして、聖書の文脈から外れることなく、何らかの悩みや戦いの中にある人に向けてどのように御言葉を解釈してお伝えできるかということを考え続けているのです。如何なる時にも、聖書のどの箇所からでも福音を語れるようになるのが私たちの目標であり、務めではないでしょうか。同じ信仰を持つ人にはどう語るか、未信者に対してはどう語るべきか。切り口を変えながら、分かりやすく御言葉を解き明かす賜物が与えられるよう、主に求めなくてはなりません。求めれば必ず与えられます。

本論 3. 御国の弟子の務め

これらのたとえを話し終えると、イエスはそこを去られた。(13:53)

これとよく似た定型句が、マタイ福音書の五大説教の終わりには必ず置かれています(7:28、11:1、13:53、19:1、26:1)。主イエスの中でも一つの区切りがあるように感じられます。一通りの教えが語られる。それに応じた弟子の成長が求められる。この福音書が5つの大きな説教で構成されているとするならば、単純な考え方ではありますが、5つの段階に応じた成長が求められていると言えないでしょうか。私たちは漫然と主イ

エスの説教を聞いてはいけません。13 章の 7 つの譬話を聞いてきた私たちがどのように変えられたかということの主は見ておられるはずです。そして 52 節から分かるのは、主が私たちに「一家の主人」のように自由に御言葉を取り出して宣べ伝える者になることを願っておられるということでしょう。

御言葉を宣べ伝えるのは教職者だけの働きではありません。一人一人の信徒がそれぞれの賜物に応じて何らかの形で福音を伝達する使命を担っています。自分は聖書知識も不十分だし、語る賜物もないし……と尻込みしてはおられません。御言葉の知識はジワジワと増やしていきましょう。そして、焦らず、段階を踏んでその深みに入っていけばよいのです。必要なら一緒に学びましょう。聖書は私たちが一生かけても学び尽くせぬもの。小さな働きではありますが、信仰者は誰もが隣人に対して福音を語る責任を担っているのです。

【結論】

「7 つの譬話」を終えるに当たって、もう一度一つ一つの譬を振り返り、自分の生き方を照らしてみたいと思います。それぞれの譬話に、自分の成長を確認する方法が隠されているはずです。私なりのチェックポイントをまとめてみました。PP

- ①種蒔きの譬（自分の心の土壌は今どうであるか）
- ②毒麦の譬（他人を毒麦として裁き、自らが毒麦になってはいないだろうか）
- ③からし種の譬（自分の周りで神の国が拡大していることを見過ごしていないか）
- ④パン種の譬（私の人格は聖霊によって造り変えられているだろうか）
- ⑤畑に隠された宝の譬（私は永遠の価値に目を向けて生きているだろうか）
- ⑥最上の真珠の譬（救いを持っているということ自体の価値を認めているだろうか）
- ⑦地引網の譬（審きを恐れる自分にこそ、へりくだった心があることを知っているか）

主イエスが思いを込めて群衆に語り、弟子たちに解き明かされた譬話の一つ一つを心に抱きましょう。そして、どういう状況下にあっても、聖霊の導きによって御言葉が出てくるように、よく祈り、知的にも備えつつ歩んでいきたいと思います。

【祈り】

人に成長を与え給う神よ。私たちの霊的成長はまことにゆっくり進んでいきます。急激に変えられることを願うものですが、あなたの導きに委ね、期待する他はありません。しかし、どうぞ着実に御業をなして下さり、一人一人が福音を何らかの形で宣べ伝えていく器として整えていただくことができますように。尻込みする心を励まし、悩みの中にある友に主イエスを紹介する意志をお与え下さい。私たちもこの方によって慰められました。同じように、私たちも慰め主の許へと大切な友を導くことができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
人の心に福音の種を蒔き、水を注いで、芽を出させ給う、父なる神の愛。
神の国の譬をもって、霊的成長を導き給う、主イエス・キリストの恵み。
聞くだけで終わることなく、御国の学者として、隣人に救いを宣べ伝える者とならせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。